

N.研究プロジェクトに高い評価

論文615本、特許申請28件などの成果

最終シンポを開催

「健やか未来への一里塚」をキーワードに、平成21年度にスタートし最終年度を迎えた日本大学N.研究プロジェクト「ナノ物質を基盤とする光・量子技術の極限追求」の第5回（最終）シンポジウムが昨年12月21日、日本大学会館大講堂で約150人の関係者を集めて



大月穰教授

開かれた。同プロジェクトには理系5学部の研究者約40人が参画。5年間で615本の論文が生まれる一方、28件の特許申請を行い、シンポジウムでは外部評価委員から高い評価を受けた。

「情報」「エネルギー」「医療」の三分野でナノ（10億分の1）テクノロジーによって解決する技術を生み出すことを目指した。

「情報」「エネルギー」「医療」の三分野でナノ（10億分の1）テクノロジーによって解決する技術を生み出すことを目指した。

「情報」では超高速記録と次世代量子情報通信の開発、「エネルギー」では太陽光発電と水素エネルギーの利用技術の開発、「医療」では遺伝子の働きを制御して病気を治す認識薬の開発に取り組み、理工、文理、医、生物資源科、薬の各学部

から研究者が参画して共同研究を行った。シンポジウムでは研究代表者の理工学部・大月穰教授がプロジェクト発足からこれまでの経緯を報告。「情報」分野から理工学部の行方直人助教、「医療」分野から大学院総合科学研究科の福田昇教授がそれぞれ研究成果を発表した。

大月穰教授の話 私達

終年度を迎えました。科学的に大きな成果を「ネイチャー」やその姉妹誌にいくつも発表していただいた先生方を始め、学部横断共同研究で優れた成果を挙げていただいた先生方、研究員の方々にまず感謝、それから文字通り「有り難い」機会を

若手研究者の研究や今後の取り組みについての報告などがあつた後、外部評価委員の一人で物質・材料研究機構の有賀克彦主任研究者が、「総評は『エクセレント』。文句のつけようがない。こんなに素晴らしいプロジェクトの評価委員をやるに誇りに思う」と講評

のプロジェクト「ナノ物質を基盤とする光・量子技術の極限追求」が、2008年度の「計画研究」、09年度からの唯一の「指定研究」として採択され、毎年の学術研究戦略会議の審査を受けながら、13年度、ついに最

通の「有り難い」機会を

与えていただいた日本大学に感謝します。基礎科学的にも、また医療を含めた技術シーズとしても良い成果を挙げられたと思っています。今後この成果をもとに学部横断を含めた研究をますます発展させたいと思います。

から研究者が参画して共同研究を行った。シンポジウムでは研究代表者の理工学部・大月穰教授がプロジェクト発足からこれまでの経緯を報告。「情報」分野から理工学部の行方直人助教、「医療」分野から大学院総合科学研究科の福田昇教授がそれぞれ研究成果を発表した。

を述べた。